

200カイリ水域内漁業資源総合調査事業－Ⅳ（トビウオ類）

伊口 航平

【目的】

この調査は、200カイリ水域の設定に伴い水域内のトビウオ類資源を評価し、資源の維持培養及び高度利用の推進に資するための基礎資料を整備するために、全国的な調査の一環として実施した。

【方法】

1 生物調査

主要産地よりサンプルを入手し、種同定・各種測定（尾叉長・体重・生殖腺重量）を行った。

2 水揚量調査、資源水準及び動向の検討

主要産地における水揚量（平成18年までは農林水産統計年報、平成19年以降は各県調べ）及び標本漁協（屋久島漁協安房本所）の銘柄別水揚量（平成8年以降）を整理し、本県海域におけるハマトビウオ及びツクシトビウオの資源水準と資源動向について検討を行った。

資源水準については、以下の方法で標本漁協における水揚量の高位、中位、低位を判断した。

A：過去23年間（平成8～平成30年）の標本漁協における水揚量の最大値

B：過去23年間（平成8～平成30年）の標本漁協における水揚量の最小値

C：(A-B) / 3

D：A-C

E：B+C

D以上の場合は高位、D以下E以上の場合は中位、E以下の場合は低位

資源動向については、最近5年間（平成27年～令和元年）の水揚量から判断した。

【結果及び考察】

鹿児島県海域においては、以下のとおりであった。

1 生物調査

漁獲の主対象となっているハマトビウオのGSI（生殖腺指数＝生殖腺重量/体重×100）の経月変化を雌雄別に示す（図1）。令和元年では、雄は1～3月に生殖腺の発達した個体が確認され、雌は1～2月に確認された。

2 水揚量調査、資源水準及び動向の検討

県全体におけるトビウオ類の水揚量は、昭和62年以降概ね1,500トン前後を横ばいで推移していたが、平成18年以降は減少傾向を示しており、令和元年は昭和51年以降最低の497トンであった（図2）。ハマトビウオ及びツクシトビウオの令和元年度の資源水準、動向は以下のとおりであった。

○ハマトビウオ（銘柄：大トビ）

標本漁協における令和元年の水揚量は75トンと前年（130トン）・平年（328トン）を下回った（図3）。

令和元年は、539トン以上を高位、539～306トンの中位、306トン以下を低位と定義し、資源水準は低位で、動向は減少であると考えられる。

○ツクシトビウオ（銘柄：中中トビ）

標本漁協における令和元年の水揚量は6トンと前年（6トン）並で、平年（13トン）を下回った（図3）。

令和元年は、40トン以上を高位、40～22トンの中位、22トン以下を低位と定義し、資源水準は低位で、動向は減少であると考えられる。

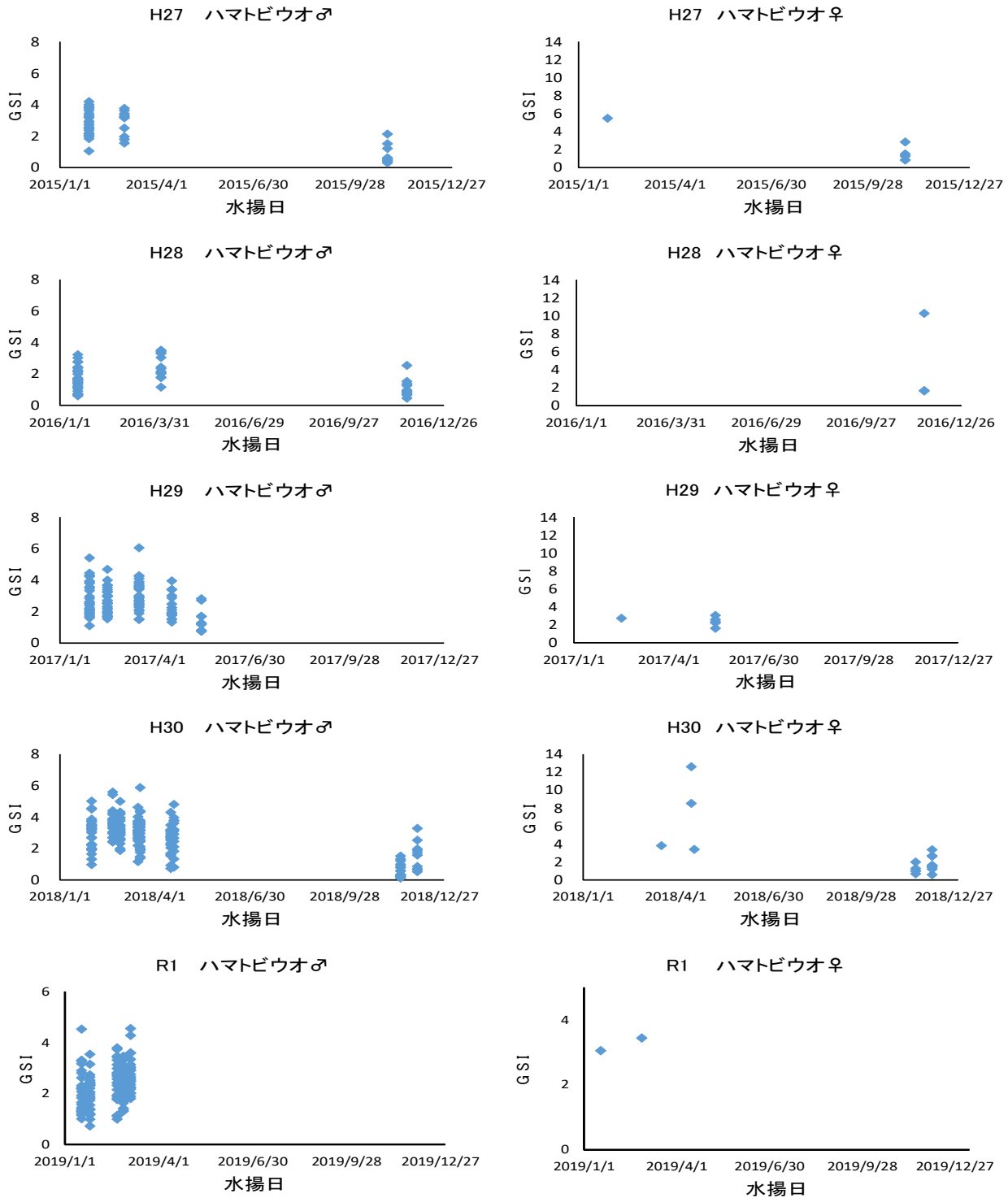


図1 ハマトビウオGSIの経月変化 (H27～R1)

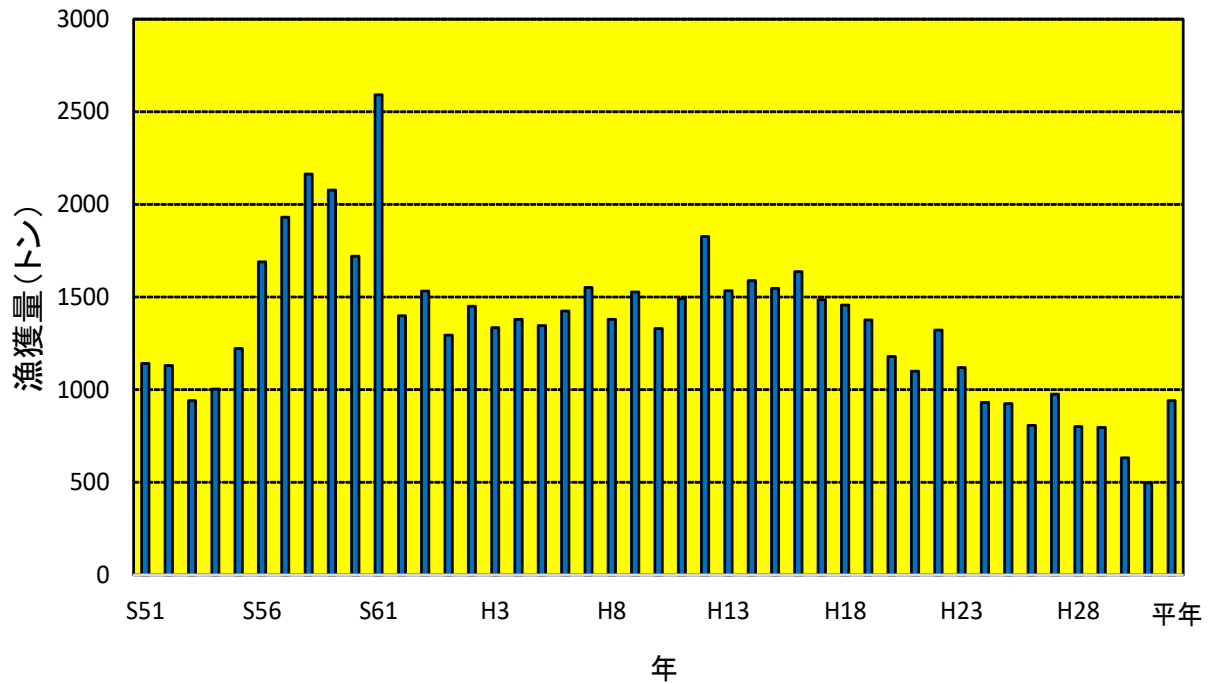


図2 鹿児島県のトビウオ類水揚量の推移

(平成18年までは農林水産統計年報, 平成19年以降は水産技術開発センター調べ)

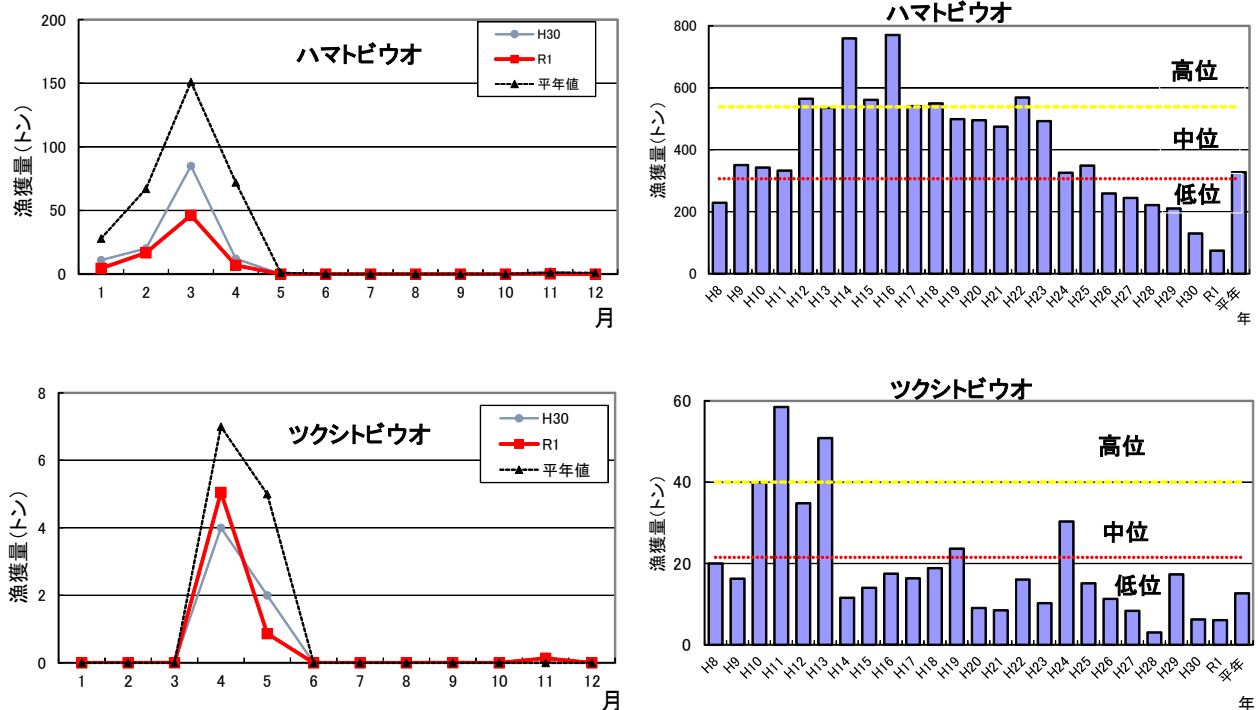


図3 標本漁協におけるハマトビウオ及びツクシトビウオの水揚量の月変化及び経年変化 (点線は資源水準の境界値)